銀友

本郷学園
同窓会誌
平成14年6月1日
第31号

六義園

総会のお知らせ

日　時　　平成14年6月22日　15：00より
場　所　　本郷学園会議室
　　（懇親会は17：00より）

同窓会のホームページアドレス　http://www.e-hgd.org/

銀友三十一号 目次 平成十四年六月一日

会長挨拶……村松　達夫　1
理事長挨拶……松平　賴武　2
本郷中学・高等学校校長挨拶……髙橋　雄　3
日本の教育改革の現状と本校の改革……池田　雅彦　4
本郷の先生たち……平田　満男　6
ワールドカップを楽しく見るために！……8
『水戸親睦旅行』同行記……下関　秀之　12
平成十三年度定期総会報告……14
同期の輪……16
運営委員会よりのお知らせ……21
文化祭報告……玉川　昭　22
学園だより……23
平成十三年度事業報告・収支報告……24
平成十四年度事業計画・収支予算……25
会費納入者一覧……26
本郷学園同窓会会則……30
物故者……32
編集後記……33

ご挨拶

同窓会会長　**村松達夫**（中十七回）

今年も三月一日母校の卒業式が行われ、三七六名の新しく頼もしい同窓会員が入会しました。誠に喜ばしくご同慶の至りです。

かまびすしかった二十一世紀の幕開けも、引き続く世界不況と同時多発テロに拉がれて明るさに乏しく、僅かに敬宮のご生誕、野依博士のノーベル賞が心和むほどのことでした。

○二年が明けても政界の汚濁、不良債権にからむ景気の低迷と晴れる処がありません。余りに早い桜の開花は染井の入学式も彩れない異常さでした。

しかし斯く取り巻く不条理な世相を嘆くばかりでは事は運びません。折角溌剌、元気一杯の新しい仲間を迎えて、わが本郷学園同窓会も今まで以上に然るべき動き、活性化を言挙げようではありませんか。

このところ日本で余り耳にしなくなった言辞に国益、愛国心、愛郷心そして愛校心があるように思います。愛社心乃至愛社精神は現実の生活に直結するところが大きいので、なお今までも身近にあるのは正直というか皮肉な思いです。せいぜいオリンピックやサッカーなど団体競技の国際試合、対校試合などに昂揚される愛国的、愛校的熱狂応援の中に懐しまれる位ではないでしょうか。

かつての戦争で在外に母校を失った人達の間に同窓会の集まりの顕著な現象を見聞きしますが単に失ったものへのノスタルジアだけでなく人生の側面を支える教育、勉強の場としての母校に対する敬愛、報恩の念が共有されているように思われます。

バブルの崩壊に到るまでの戦後五十年近い右肩上がりの時代が無情に置忘れてきたのではないでしょうか。アメリカの占領政策も多少の影は落としているかもしれません。国歌「君が代」、国旗「日の丸」の盛衰を憶います。

私達もこの辺で、もう一度八十年を今に歩み続ける母校を身近に見直してみてはと思います。

今年から卒業各回期が、せめて年一回同期会の開催を提唱します。毎年一回以上の集まりをもつ大変まとまりのよい回期のある反面、卒業以来殆ど集まることのなかった回期も少なくない現況には、それなりの事情があるでしょうが第一には同期の仲間への呼びかけ手の不在が大きいと思われます。呼びかけの元になる各回の会員名簿、住所録は概ね整えられていますので、同窓会本部が呼びかけの役務や経費の応援をします。その回期の理事の方は本部と一緒に具体化に取り組みましょう。

同窓会は会員各位がその回期の活動に参加されて有機的に連携していかないと全体的に機能することは難しいと思います。

皆さんの一層のご協力をお願いします。

ご挨拶

本郷学園理事長
松平　頼武

同窓会の皆様には、日頃母校を想い、母校のためにご支援、ご指導をいただきまして誠にありがとうございます。お蔭様でこの春も三七六名の高校の卒業生を送りだし、中学には二四一名、高校に三四〇名（内本郷中学から一九三名）の新入生を迎え入れることができました。

大学受験はまずまずの成績でしたし、中学・高等学校の新入生はレベルの高い生徒に入ってもらうことができました。

文部省の教育改革で今年から週五日制、中学校の新カリキュラムの実施と大きな変化を要求されました。加えて教授力UPのためには教諭が全員前向きに取組んでいただいています。

また、新しい試みとして国立大学志望者のために中学三年生から特進クラス（特別進学クラス）を作ることになりました。

そこで本年度から（学）攻玉社で二十年間教頭を勤められました、髙橋　雄先生を本校の校長に迎えることといたしました。先生のお人柄とご経験でかならずや本校はより活性化がなされるものと期待しています。

私は七年間校長を務めましたが、これからは理事長として学校の経営に専念することに致しました。校長のときに同窓会の皆様からいただきましたご指導、ご鞭撻に心から感謝申し上げます。今後とも何卒よろしくお願い致します。

今年は春の訪れが早く、中学校の卒業式、三月二十日には染井・吉野桜が満開で、入学式の四月六日には全員の記念写真のバックは葉桜でした。毎年新入生への挨拶では「この学校がある地は、江戸時代、染井村といってソメイヨシノ桜の発祥の地で、桜の名所です」と紹介していましたが、今年は「来年の春の花を期待してほしい」と結びました。

ご挨拶

本郷中学・高等学校校長　髙橋　雄（たけし）

同窓会の皆様、私は本年四月一日より学校長をお引き受けする事になりました髙橋雄でございます。どうぞよろしくお願いいたします。私は、大学を卒業してから私立学校一筋の教育に専念して参りました。この間につちかってきたものを本郷の教育に生かせればと考えていますので、同窓会の皆様にはご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

さて、二〇〇二年からの教育改革がいよいよ始まりました。この改革は、一般には学力低下を招く改悪だといわれています。多くの私立進学校がそうである様に、学校も建学の精神に基づいて独自の教育をすることにいたしました。週五日制を守りますが、講習・補習を土曜日に持って行くことで、クラブ活動に支障のない様に致します。さらに、学校行事等をできるだけ土曜日に行うとともに、講演会なども行う予定ですので、同窓会の皆様にもお願いすることがあるかとおもいますので、その節はよろしくお願いいたします。

今年の大学への進学は、東大が一名、東工大学が三名と国立大学は増えましたが、早大、慶大、上智大など多くの大学への合格実績が昨年に比べて減少したことは残念ですが、今年度は心して頑張りたいと思います。そのため、今年は高校一年からの特進コースを設置して、難関四大学を目指す生徒の指導に当たり成果をあげるつもりです。

また、新入生については、中学生を一学級増の六学級二四〇名で募集したところ昨年より若干少ない一八六七名が志願し、二四一名が入学しました。志願者数は減りましたが、高いレベルの生徒が入学してきました。また、高校の新入生についても高レベルの受験生が多く、手続き辞退者も例年に比べて少なかったため、一学級増の四学級になり、中進生を含めて九学級でスタートすることになりました。

このように、新入生や保護者から期待されている本郷が期待にそう教育をしなければならないと、教職員一丸となって教育にあたる所存です。

世間では、最近の若いものは自分勝手で礼儀を知らないといわれています。しかし、本郷生を見ている限り決してそんな事はありません。本郷生は言われた事をよく守っています。これからの世界を背負って立つ人間を育てるのが、本郷の教育だと思います。従って、本郷生には「人の痛みや悲しみが分かる優しさを持った人」つまり「思いやりのある人」になること・「礼儀正しく人の意見を聞く人」つまり「スマートな紳士」であることを身につけさせたいと思っています。私は、中高の時は、良い友人を作り・良い師に会い・自分が何をすべきかを探ることだと思います。教育は育てることが大切と考えていますので、同窓会の皆様には、これからも母校のために後輩の生徒たちの姿を見守って頂きたいと思います。少子化の時代の中で本郷学園のさらなる飛躍を目指すためにも同窓会の皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

日本の教育改革の現状と本校の改革

本郷中学・高等学校副校長　**池田雅彦**（高十四回）

本校の本格的改革は三年目をむかえています。この改革の出発点は、四年前の中学入試で大手受験産業での偏差値（八十％合格ライン）が五十を割ってしまい、ある業者テストでは四十五の偏差値に下がってしまったことにあります。今後、私学として存続するには中高一貫校としてのしっかりした基盤がなければなりません。そのためには教職員一丸となって学校の改革に取り組む必要があります。先ずは、現状分析をして危機意識を持つことでした。管理職を中心に積極的に外部の情報を得るために塾などの会合に出席し、それを教職員に伝えたり、また、受験関係業者をお呼びして教員に対する講演をしてもらいました。「学校は安定していてこのままでもよい」という認識を変えるためです。

最近、文部科学省の教育改革が急ピッチで進んでいます。同省の改革には矛盾点や現場認識のなさも指摘されています。小中学校の主要教科内容の三十％削減といいながら「指導要領は最低基準だ」とか、高校で帳尻を合わせる（大学入試の難易度はかわらないため）などです。「総合的な学習」も然り。また、公立の私立化の問題もあります。コミュニティースクール構想、塾の学校参入など「規制緩和」と称する何でも有りの方向性も見えてきました。さらに、石原都政の教育改革で都立高校ビック四（日比谷・戸山・西・八王子東にやる気のある教員を集める）設置、学区制の全廃、独自入試問題などは何を意味するか。それは都立高校の複数日入試日程に進み、二番手の進学校（小石川・両国など）をつくって旧ナンバースクールの完全復活を企図するものでしょう。都立高校は上位校と下位校に二分極化するでしょうが、都立上位校との併願の多い本校の高校入試は、ますます苦しくなります。そのためにも中学入試は重要なのです。本校の今年度入試から中学六クラス募集、来年度入試から高校二クラス募集にしていくのはその布石なのです。

今後の十年間を見据えますと、公立の一貫校化が進むことが問題です。区立中学と都立高校

の連携校化、千代田区などにその動きがある中等学校（中高一貫校）の設置などは、授業料等の公私間較差が大きい現状では私学にとって脅威となります。私立学校と同様なことをやるのであれば、経済的負担の平等化が成り立てば問題はありませんが、公立学校にふんだんに税金をつぎ込んで改革を進めれば、これは私学潰しの何者でもありません。

このような状況で、本校が今のままでよい訳がないのです。安定した中高一貫校になっていなければなりません。そのためには進学実績を上げる、楽しく伸び伸びとした学園生活が出来る、私学の独自性、建学の精神に基づく教育が本当に出来るかにかかっています。このような観点で本校の改革を進めてきました。

改革の一つは、学校六日制・正規授業五日制の実施です。これには二つのねらいがあります。一つは、週三十四時間授業から三十三時間授業に換わり、七時間目の授業が二日（ＬＨＲを含めては三日）はいります。この七時間目の授業を中高で別々の日に設け、六時間の日を部活動日にし、土曜日は午前中は中学生、午後は高校生と分けることにより中高ともにグランド等の施設を同じように使えるようにします。中学生にも伸び伸びと活動させるとともに、高校生が部活と勉強を両立出来るようにしたいのです。二つは、土曜講座を設けることです。これは中学での芸術や技術家庭などの正規授業時間不足分を教養講座として設け、また、高校では進学にむけての講座制講習を設けるなど、授業では補えないことや自分の目標とする大学にどう入れるか、学校としてその手助けをどうするかということです。

改革の二つ目は、授業の充実です。たとえば、英語科の授業改革では本校のＯＢである平田先生をアドバイザーとしてその改革を進めています。また、他の教科においては、よい人材を求めて専任率を高め、きめ細やかな指導が出来るよう、生徒が満足できるよう体制づくりをしています。

改革の三つ目は、入試委員会・広報室を中心とした広報活動などにより、中学入試も高校入試でも、ここ三年間はレベルの向上が著しくなりました。とくに、今年度の中学の業者テストでは偏差値（合格率八十％）では五十七程度になっています。現在の中学生は偏差値五十三～五十六程度の評価でした。そのため、難関国立大学を志望する生徒も多くなり、それに対応して中学三年より特進予備クラスを、高校一年より特進コースを設けることになりました。生徒一人ひとりの目標を高め、頑張らせたいと考えています。但し、ただ勉強だけでなく部活動や生徒会活動なども奨励し、本校の建学精神に基づく、真の教育活動を心掛けていきたい、そのためには部活動のあり方も変えていかなければなりません。先輩諸氏のご支援をお願いいたします。

本郷の先生たち 第一回

植竹恒男先生

平田満男（高七回）

植竹恒男先生

いまから五十年ほど前の本郷には、のちになって大学で教えるようになる先生が多かった。東京都立大学に移った今村與志雄先生、開成から立教大学にいった林英夫先生などが、その例である。朝鮮戦争がはじまるまえの不況と就職難のなかで、学問の世界の若いエリートたちが、新制の中学や高校の教員として働いているというのは、めずらしいことではなかったのだ。

植竹先生は、昭和二十七年三月に本郷を去り、成蹊高校から亜細亜大学にうつり、昭和六十三年から数年のあいだ教養部長をつとめて、平成九年三月に定年退職している。けれども植竹先生の場合は、今村先生とはちがって、私立の中学で教えていてもいずれは大学に移ることを約束されていたエリート教員というわけではなかった。現在の茨城大学工学部の前身である多賀高等工業学校機械科の出身で、中学と高校で数学を教える資格はもっていたものの、本郷に教員として籍をおきながら東京理科大学理学部数学科を昭和二十七年に卒業して理学士になっている。当時このようなケースは、これも決してめずらしいことではなかったとはいうものの、先生の数学教師としての出発は、その四十五年後に日本数学教育学会の会長に就任することを予測させるような、華やかなものではなかったはずである。

植竹先生が本郷にきたのは、ぼくが本中に入学したのと同じ昭和二十四年のことである。新任教員の紹介で、校庭の生徒たちのまえにおかれている朝礼の壇にのぼろうとして、段に足をかけたとたんに、つまずいて倒れそうになった。「べつに緊張していたわけではない。当時は物がなくて、足にあわない靴をはいていたから」と今になって解説するのだが、どうだか分かったものではない。とにかくこれが、本郷中学教員としてあゆみはじめた植竹先生の第一歩だったのだ。

このころはアメリカ軍の占領政策の一貫として数学でも日常生活との関連を重視する「生活単元学習」なるものが幅をきかせていた。自分の家の平面図をかかせて、それを幾何学と結びつけていくというような教育法である。これでは、どうしても数学の抽象性とその美しさを教

えることが、ないがしろにされる。そこで先生はガリ版ずりの補充プリントを毎時間のようにくばって、数学の本質にかかわる部分をぼくたちに理解させようとした。三角形の合同と相似をこのプリントで教わった時の、あの数学の授業の面白さをぼくは今でもおぼえている。

あのころの本郷中学では、教育経験のまったくない新任の教員が自分で工夫して、教科書からはずれた数学教育をすることを許していたのだろうか。

「なに、中学一年の授業は、全部ぼく一人でやっていたから、自由にやれたんですよ」

これも、驚きである。植竹先生は一クラス五十人をこえる中一の全学級をあいてに、週二十時間も授業を担当し、当然のことながらクラス担任もやり、放課後は数学クラブの課外活動を指導していただけではなく、キャノンを手にして卒業アルバム（そのころは、生徒の手作りだった）の写真をとりまくり、なおかつ東京理科大の学生として自分自身の数学の勉強までしていたのだ。

午後の図書室のちいさな部屋で、ほかの学校の先生や大学生・院生などが集まって、研究会をしている光景がガラス窓のむこうにみられることがあった。自分を教えてくれている先生が、自分でも勉強をしている。こうした事実を知ることほど、生徒にやる気をおこさせることが、ほかにあるだろうか。もしも植竹先生がいなかったら、ぼくは本郷高校を卒業しなかったかも知れないし、大学の教師になろうとしなかったかも知れない。自分もながく教育関係の仕事をすることになって、卒業式で「仰げば尊し我が師の恩」とうたうとき、ぼくには植竹先生という「我が師」がいるのだという幸福な思いに、いつも胸がしめつけられる思いがするのである。

そんな植竹先生を、本郷学園は石を投げつけるようにして、追い出してしまった。昭和三十七年のことである。そのころ教務主任をしていた先生にたのまれて、大学院にいたぼくは一年間だけ本郷で英語を教えていたから、どんな事情で植竹先生が本郷をでて成蹊高校に移ったのか、だいたいの所は分かっている。けれどもこの三月はじめに沼袋のお宅で、正確な事実をたしかめようとした時、先生は

「そのことは、思い出したくない」

といった。先生が思い出したくもないといっていることを、昔の生徒が書くわけにはいかない。ただ本郷学園から解放されたことが先生にとって幸いだったことは確かで、その後の先生はそれこそ水を得た魚のように数学教育の分野ですぐれた仕事をつづけ、日本数学教育学会の会長にまでのぼりつめたことは、この文のはじめに書いたとおりである。

植竹先生の本郷における功績にまったく報いることなく、先生を弊履のごとく捨て去ったことで、本郷学園は日本における数学教育の進歩に多大な貢献をした。こうした悲しいジョークが通用しないようにならなければ、本郷に明日はないだろう。学校にとっての宝は、すぐれた教員以外にないのである。

ワールドカップを楽しく見るために！

本郷学園サッカー部の歴史

本郷学園サッカー部の歴史は学園創立とほぼ同時期から始まり、戦後昭和三十年代野口先生が部長としてその基礎を作って来ました。昭和四十年阿出川信夫先生（高校十三回卒）が、日本大学卒業後、本校体育教員として指導、野口部長、阿出川監督体制で全国レベルのチーム作りを達成、数々の大会に優秀な成績を修めました。昭和四十五、四十八、五十一、五十六年にはインターハイ出場、昭和四十八、五十、五十三年と全国大会出場、昭和五十三年には全国三位の輝かしい成績を修めています。また、数々の名選手を輩出しています。今回、FIFA（国際サッカー連盟）公認の審判員である上荒敬司氏（高校三十回卒）をインタビューしました。

上荒敬司氏

上荒（かみあら）敬司氏プロフィール

昭和五十年埼玉県春日部市の中学より本郷学園入学、サッカー部入部、高校一年でインターハイ出場、二年で全国大会、三年のときは関東大会二位の成績を修めた。その後、日本体育大学を経て現在、浦和学院高校教諭、サッカー部顧問、FIFA公認審判員。J1、J2、JFLと国体、国際試合など年間三十五試合くらいの試合を消化しながら浦和学院高校のサッカー部を指導している。

野田の鷺山

平成十三年十二月一日私たちはインタビュー会場の浦和学院高校を訪問しました。東北自動車道浦和インターの少し先、二〇〇二年ワールドカップ埼玉会場の埼玉スタジアム二〇〇二の西側の丘に学校はありました。ここは昭和三十年代までは鷺の飛来地で有名な野田の鷺山を造成、学校を建設したそうです。校門を入り野球部の生徒の元気な挨拶に迎えられ、上荒氏と面会、校内を案内して戴きインタビュー会場の「しらさぎ博物館」に入りました。ここは地元の写真家、田中徳太郎氏が永年かけて写した白鷺の写真と地元の昆虫の標本、鳥や動物の剥製

などが展示されています。また、この博物館は一般にも開放され地元の方々も頻繁に利用されているそうです。興味のある方は訪れてみて下さい。（月曜休館）

インタビュー

―上荒さんはサッカーをいつ頃から始められたのですか？

上荒　私は遊びで小学生の頃からサッカーをしていましたが、本格的に始めたのは中学に入ってからです。中学三年の高校受験で当時、東京都の私立高校では帝京高校と本郷高校が全国大会出場を競っていましたので、サッカーをやるならばと、担任の先生と相談し総合的に見て本郷高校を受験しました。高校時代、阿出川先生にはお世話になりました。

―審判員になった経緯をお聞かせください。

上荒　高校三年の時、マネージャーから審判員の試験を一緒に受けに行かないかとの誘いで四級の試験を受け合格しました。当時、日本

サッカー協会は、岸記念体育館にあり原宿まで行った記憶があります。大学一年で三級、その後ブランクがあり二十六歳のとき二級を受験しましたがこの時はトレーニングをやり直し八キロの減量を行いました。一級を受験したのは三十五歳で一級資格取得としてはぎりぎりですね。

一級を取った翌年にJリーグ担当をしてその年優秀な成績を評価され国際審判員副審にノミネートされ三年目に国際審判の資格をもらいました。これはあまりにも早い昇進で私としても驚きでした。現在、国際サッカー連盟ではその道のスペシャリストを養成するため、主審と副審を分けて養成、私はJリーグの担当では副審をしています。

―国際審判員とは？

上荒　日本サッカー協会の審判委員の資格は一級から四級まであり一級を獲得している者が現在全国で百二十名から百三十名おります。一級の審判委員を必要とする試合がJ1、J

2（プロリーグ）ＪＦＬ（実業団）これに国体、と各種全国大会（天皇杯、大学選手権、高校の全国大会等）があります。百二十～三十名でこの試合を消化するので国体シーズン（毎年九・十月）は非常な忙しさです。特に今年は学校で高校三年を担任していましたので受験指導などやりくりが大変でした。同僚の先生にはいつも感謝しています。

国際審判員とは日本サッカー協会の一級審判員のジャッジする試合（Ｊリーグ）をインスペクターが評価、採点し、毎年ノミネートされ翌年国際審判員としての資格を与えられるのです。ですから今年資格があっても翌年資格があるとは限りません。また、年齢も四十五歳までです。日本サッカー協会では五十歳を定年としています。

審判員への試合の要請は国際サッカー連盟（ＦＩＦＡ）から日本サッカー協会を通じてあり、殆どが海外遠征で国内ではトヨタカップくらいです。また、日本には現在、主審九名、副審十名の国際審判員がいますが来年は少なくなるでしょう。今回のワールドカップに出場できる審判員は、アジア枠で十二名（主審五名、副審七名）日本からは主審が一名指名されました。海外では審判員ステータスが高いのですが日本では低い。Ｊリーグの選手達でも審判にはなりたくないと言う選手が多いです。

―今まで、審判をしていて記憶に残るゲームを教えてください。

上荒　三試合ありますが、

一つ目は九十七年ワールドカップフランス大会予選のイラン対サウジアラビア戦、テヘランで行われたのですが十二万人の観衆の中、国と国との戦いを実感、娯楽の少ない国のサッカー熱を実感しました。特に国際審判員として一年目の年のことです。

二つ目は、トヨタカップでヨーロッパ代表レアルマドリッド対南米代表バスコダガマ戦です。憧れの試合と世界の一流選手のプレーの中で審判が出来たことで感動しました。

三つ目は、今年のワールドカップアジア最終予選（プレーオフ）ＵＡＥ（アラブ首長国連邦）のアブダビで行われたＵＡＥ対イラン戦、地元の応援のすごさは強烈で自国に不利なジャッジをするとスタンドから物は投げるなどでペットボトルが三個くらい背中に当たりました。睨み付ける（振り向く）と罵声や物が飛んできて危機感を抱きました。試合終了後、ピッチはごみが散乱ひどい状況でした。

―さて、この銀友が発行される頃（5月中旬）日本はワールドカップ一色になっていると思いますがワールドカップを楽しく観る方法を教えてください。

上荒　生徒にはよく言っているのですが、生で見てほしい特にワールドカップはオリンピック以上に盛り上がり異常な興奮に包まれます、是非見て欲しいですね。

ところがなかなかチケットが購入できない問題もありますね。もしチケットが手に入れば、

選手のプレーはもとよりベンチの動き審判の動きスタンドの興奮などなど。

篠　私も先日、本郷高校のラグビーの準決勝戦を始めて江戸川スタジアムに行って観て来ましたがテレビと違う迫力と闘争心の凄まじさにグランドスポーツの楽しさを実感しました。今度はルールしっかり覚えてから見に行こうと思っています。

―現在サッカー界で活躍している本郷のOBにはどんな方々がおりますか？

上荒　我々の二年先輩で加藤好男さん（高校二十八回卒）Jリーグ発足時にはジェフ市原でGK　現在、日本サッカー協会強化委員（U19日本代表コーチ）。田口孝広さん（高校二十八回卒）東京ヴェルディーでU19のコーチをしています。佐熊裕和君（高校三十四回卒）彼は私立桐光学園のサッカー部監督ですが教え子には日本代表の中村俊輔がいます。この他、教員やクラブチームの監督、コーチとして指導に当たっている方や現役としてプレーされている方など、多方面において活躍しているOBは多数います。

―最後に本郷の後輩に望むことがあればお願いいたします。

上荒　最近、本郷にほとんど行っていないので詳しいことはわかりませんが友人からの連絡ではスポーツ推薦制度が廃止になるとか、埼玉県の高校では学力の優秀な県立高校がどのクラブでもそこそこの成績を収めています。好きなサッカーをやる為に本郷を選んだわけですから、指導者を信じバカに成りきりサッカーを学んで下さい。今しか出来ない充実した学校生活を送ってください。私はうちの生徒にスポーツは「愛とロマンだ」信頼関係の無い指導はしないと言っています。

―本日はお忙しいところ有り難うございました。今後のご活躍を期待いたします。また、同窓会活動にもご理解いただきご協力お願いいたします。

感想

学校の教育者の立場と国際審判員、二足の草鞋で年間ほとんど休みの無いスケジュールのなかインタビューに快く協力して頂きました。自己に厳しく、人とは信頼関係を持って接する。FIFAのジャージが眩しく、清々しい気分でインタビューさせて頂きました。インタビュー後、埼玉スタジアム二〇〇二と見沼田圃、更に隣接する雑木林と桜並木を案内して頂き、「春には授業でこの辺りを散策させるんです」と言う上荒先生の言葉を思い出しながら浦和市（さいたま市）東部の冬枯れの武蔵野が薄日に映え亘る自然を満喫して来ました。都心から一時間以内、野田の鷺山が変貌しながらもこんなかたちで残っているのを再発見した一日でした。

レポーター　篠　喜三郎（高校六回卒）
同　関塚　正治（高校二十回卒）

『水戸親睦旅行』同行記

下関秀之（高五十回）

平成十三年十一月十七・十八日（土・日）の両日、第二回本郷学園同窓会親睦旅行が実施された。第一回の親睦旅行では、本郷学園理事長である松平氏のゆかりの地・高松を訪れたが、今回は高松松平家と関わり合いの深い水戸徳川家の史跡見物となった。

参加案内書によると上野駅に十時三十分集合とあった。しかし、自宅からの距離と時間を検討した結果、当方は水戸駅からの合流となった。

水戸駅に集まったのは、世代を大きく越えた総勢十三人。水戸に到着した時点ですでに十二時をまわっており、そのまま駅前のそば屋になだれ込む。そば屋では天盛りを頂いたが、なかなか美味しいお店だった。

そば屋の隣にはタクシー会社が入っており、四台に分乗して徳川博物館へと向かう。徳川博物館はその名の通り、水戸徳川家のゆかりの品々を数多く展示しており、水戸藩第二代藩主・水戸光圀公の印籠なども展示されていた。博物館の案内人の方による説明では、この印籠、時代劇では相手に身分を示すものとして使われているが、実際には薬を入れて持ち歩くために使われていたのではないかという。また、全国津々浦々、気の向くままに旅をするというイメージがあるが、実際には何度かに分け、領内の各地へ赴いたようである。

徳川博物館で記念写真を撮影した後、再びタクシーに乗車、弘道館へと向かう。弘道館は水戸光圀公が藩士の教育の為に計画したが実現できず、水戸藩第九代藩主・徳川斉昭公が遺志を継ぎ天保十二年（一八四一年）に開館したという、由緒ある藩校である。弘道館は水戸城に隣接して建設されたが、現在では周囲に建物が建ち並び、当時の面影は部分的に

しか観ることができない。

弘道館を一通り見学した後、待機させておいたタクシーで宿泊先である茨城交通大洗ホテルに向かった。

ホテルに到着後、一息ついてすぐに浴場へと向かう。ホテルの高層階にある浴場からは、夕暮れの海岸や大洗港が一望でき、本当に気持ちの良い風呂となった。風呂の後は、大洗の名物・鮟鱇（あんこう）を煮込んだ料理、どぶ汁をメインとした宴会の始まりである。鮟鱇は初めて食したが、くせが強く、なかなか慣れるまでが大変である。しかし、慣れてしまえば意外と美味しい。最後はどぶ汁から作ったおじやで食事は終了となった。

食事の後は部屋で宴会をするもの、ホテルのバーで飲むものなど、各々が好きなように過ごし、夜が更けていった。

夜中に目を覚まし窓辺に座って海を眺めていると、数分に一個の割合で流星が現れた。次の日は獅子座流星群が大出現をした日であり、その前兆はこの日にすでに現れていた。

翌日、早朝に起床し、食事を済ませるとそのまま解散となった。復路はバスで水戸駅まで出て、特急『フレッシュひたち』で上野に向かうことになった。特急には久々に乗車したが、往路の鈍行の旅とはまた違った楽しい旅となった。

今回のツアーでは、徳川家の歴史についての学べたことも良かったが、それ以上に年輩の方々と一緒に旅行をさせていただいたということが、自分自身にとってたいへん貴重な体験となった。普段とは違った旅をしてみるのも、たまには良いかもしれない。

平成十三年度定期総会報告

平成十三年六月十六日午後三時より
於　本郷学園会議室

平成十三年度の同窓会定期総会が、六月十六日午後三時から学園会議室において開催された。司会の丹波副会長（高十八回）より開会の宣言があり新会長と新理事の紹介があって、式次第にのっとり村松達夫新会長（中十七回）の挨拶と抱負がのべられた、引き続き新理事の山内英夫氏（高三回）と遠田守利氏（高十九回）の紹介と挨拶があった。

この後、松平頼武理事長兼校長の挨拶が、急用で変更となり池田副校長の代行出席までの間、議事進行し議長選出と書記の選出があり議長には、村松新会長があたり書記には篠副会長（高六回）と下関理事（高五十回）が選ばれた。

ここで、池田副校長の代行挨拶となり「松平理事長が国際ボーイスカウト連盟の会長に就任して本日が第一回目の三鷹会合に出席のため、当総会に出られない旨の説明があった。」又今日は、四谷大塚の研修会が本校で二時から始まって居り、三百名程の父兄が集まって来ている、更に今年から中三の吹きこぼれ生（超優秀生）を対象にした特別進学クラス設定と日能研や四谷大塚といった大手の進学テスト業者の研修会を随時進める予定、又平田先生の力で英語レベルが上向きになってきている。…といった説明があった。

此れより議事に入る。

一号議案、平成十二年度事業報告は、秋元副会長（高七回）の「銀友三十号の二十四ページを参照」に基づく説明で、了承された。

二号議案、平成十二年度会計報告は、関塚副会長（高二十回）の「銀友三十号二十四ページを参照」、支出の各項目をわかり易くしたとの説明あり、了承された。

三号議案、平成十二年度会計監査報告は、見並監事（中十二回）と松坂幹事（高六回）より行われ了承された。

四号議案、平成十三年度事業計画案は、秋元副会長の「銀友三十号二十五ページ参照」に基づく説明で、承認された。

五号議案、平成十三年度会計予算案は、寺田副会長（高二十四回）の「銀友三十号二十五ページ参照」に基づく説明で、承認された。

六号議案、平成十三年度名簿編集計画案は、望月副会長（高三回）より、名簿の基本が出来たので、これからは肉付けをして行きたい。特に新制の七、八、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、三十回の十回期は住所判明者が十％程度しか判っていない。今年はここを重点目標とする、同期の横の連絡をお願いしたい、との説明があった。

七号議案、平成十三年度銀友編集計画案は、篠副会長（高六回）から、銀友は同窓会唯一の機関紙で学園の近況やＯＢの活躍、同期の顔ぶれ…等々母校を知る上でのメールであり、遠くはなれたＯＢへの橋渡しでもあります。

毎号三十から三十五ページで纏められていますが、その半分は毎号同一パターンで紙面が埋まります、残り半分のページはどうしても投稿に頼るしかありません。是非ＯＢ各位の投稿をお願い致します。との説明あり。

八号議案、平成十三年度ホームページ計画案は、田中副会長（高二十四回）が欠席の為関塚副会長が代行説明する、ＨＰの内容は随時更新している、現在までの所六千五百名程のアクセスがあったとの事です。

九号議案、会則の一部改正案は、村松新会長より、銀友三十号二十七ページ記載の通りであり、従来の会長副会長を改めて運営委員会とすることで担務理事の方々にも出席願えるようにした、との説明あり。　十号議案、文化祭出展計画案は、関塚副会長から、第四回となる文化祭を九月二十二、二十三日を予定、八月の理事会までに具体策を作っておきたい、との説明あり。

十一号議案、その他

ここで、関西同窓会副会長宮本幸雄氏（中十五回）の紹介と挨拶があり関西同窓会の状況と、近況として村上信夫氏（高二十四回）が、ＮＨＫアナウンサー部長として大阪支局勤務で活躍している、との説明があった。

この後、提案が2件あって

提案一、奥平氏（中十五回）より、関西同窓会の認知についての件

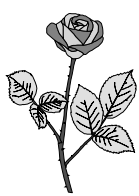
二、秋元氏（高七回）より、在校生全員に銀友を配布する件

この二件については、預かりとして後日、運営委員会にて検討する事で了承された。

以上で全ての議案が滞りなく行われ賛成多数で閉会した。

この後、親睦会が三菱養和会内、「レストランパルテイール」にて賑やかに行われ、八十五歳になられた大先輩の尺八による飛び入り演奏もあって和やかに終了した。

（書記：篠、下関）



同期の輪

やすなこの会

ホテル機山館で開催

（中十五回同期会）

お世話になった担任の先生のお名前の頭文字をとったわが同窓会「やすなこの会」が、平成十三年十一月十日に、ホテル機山館で十八名の参加者を得て開催された。

卒業以来すでに六十年になり、その間、戦争や戦後の混乱を乗り越えて、精一杯生きてきた者達も、多くは喜寿を迎える年となり、同期会に出席することも難しくなった年代にはなったが、集まった者達は皆大変元気で最近の学園の状況や、友達の消息を尋ねているうちに、予定の時刻がきてしまい、「ボケずに穏やかな老人」を心掛けようと声をかけ、次期幹事を指名して解散した。

渡邉好夫　記

第三回「染桜会」

「秋日和」のお台場海浜公園で開催

（中十七回同期会）

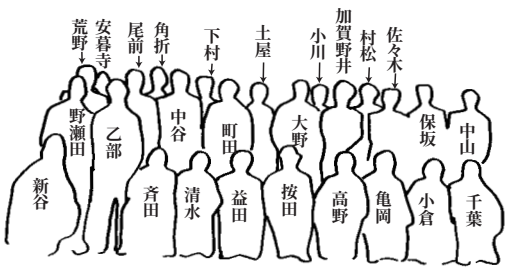
雪の降る昨年一月末、母校で三十年ぶりの復活第一回のクラス会開催を皮切りに、第二回は三月江の島岩本楼での一泊。そして第三回はなんと僅か半年後の十月にお台場海浜公園でと、永年の空白を埋めるかの様な立て続けの年三回の開催でしたが、級友二十七名が参加、賑やかにフジTV、平和の女神像を見学、次に渚を散策。「船の科学館」で羊蹄丸、宗谷丸等見学。館内の中華の店で会食。年齢から健康や孫の話も多いが青春時代の話も尽きない。西日の落ちる頃再開を約して解散。

さて、第四回はこの六月二日に日の出桟橋から一時間の船旅で葛西臨海公園行きです。歩きながら、話ながら、軽い食事を取りながらの会は健康にも良さそう。高齢者のクラス会は肩肘張らぬ、日帰りのこんな会合がメインになるでしょう。

会名の「染桜会」は染井の桜を忘れられずそれをイメージして命名しました。それにつけても最近の母校の躍進振りは私たちも嬉しく、心からの声援を送ります。

高野正美記

（平成十四年四月十二日）



中十八回同期会報告

教育会館で開催

（中十八回同期会）

「雨ニモ負ケズ…」集まりました。

この同期会も三十回を数え、その上二十一世紀最初という記念を平成十三年十一月十日に開催。

その日は朝からドシャ降りで、出席がどうかと心配でしたが、予定者全員の四十七名が揃い、その元気さと、この会への思いに感じ入りました。

会場は神田の教育会館で、心なしか、いつもより盛り上がったと思いました。

前田和男記

中二十回同期会報告

魚源で開催

（中二十回同期会）

平成十四年四月十三日（土）四時頃、六義園を散策約十六名が集まり、桜は盛りを全く過ぎ緑一色の前で写真撮影。五時から　魚源で開催。名簿上の七十八名に案内し、返事が四十六名、当日の出席者は二十八名であった。昨年に引き続き大変盛況な宴であった。

なお、毎年やれ！との励ましともつかない激励の言葉に幹事一同感激している次第。改めて御案内しますが来年は、二年生に進級し、組の編成替え、勤労動員、一家での地方への疎開、幼年学校、少年航空兵？・・・の六十周年記念（このてで平成十七年、波乱の四年生まで、平成十八年は喜寿とも重なる）。などとネタは尽きませんでした。

その他、三回の手術をし、厳重なカロリー制限のため飲み食いはできなかったが、皆さんとお会い出来ることを何よりの御馳走と、送迎を奥様の運転で（美談のなかの美談であります）藤原君も出席してくれました。

三浦秀雄記

皆川　百田　鈴木　久保　船橋　横山　羽山　三浦　山下　小林　鶴岡　金沢　対馬

倉橋　田島　富田　土肥　大塚　林　藤原　新井　藤林　市川　橋本　大屋　中島　市川　野口

染井二六同期会

巣鴨地蔵そばで開催

（高二回同期会）

恒例の同期会は去る四月二十日に巣鴨地蔵そばで開催された。幹事の山口氏本日の出席十五名と欠席者の近況メモ（ほとんどが体調不良）が配られた後、昨年出席し、本日の幹事役山岸正治氏が、昨秋病に倒れ他界された事が報告された。

続いて、同窓会役員の山内氏から、本郷学園の近況について詳細な報告があり、スポーツ校から進学校へのイメージ改革を知り母校の将来に大きな期待をもつことができました。大槻氏の乾杯で宴席に移ってからは、今年が丁度満七〇才となる節目の年を迎え、お互いに胸襟を開いて、過ぎた日々の生活を語り合い、酒量も倍増する楽しい一日を過ごしました。

中島正次郎記

高十回生同期会

川治温泉柏屋で開催

（高十回同期会）

平成十二年十二月十九日の全日空ホテルでの同期会に続き、平成十三年九月二日～三日川治温泉柏屋にて一泊二日の同期会を催しました。前回よりも更に参加人数が少なく残念でしたが、四十余年振りに修学旅行の気分になり浴衣姿で飲み食べ語る歌うなど楽しい会と成りました。我々全員が還暦を通過しました。これからが第二の人生のスタートです。これからも楽しい企画を作りますので多数の参加を希望します。

柏屋の須賀さんには大変お世話に成りました。深謝いたします。

山崎昇記

運営委員会よりのお知らせ

会長挨拶にもありました様に、同窓会運営委員会と致しましては各回期の同期会及びクラス会開催のお手伝いを始めることに致しました。

※初めて同期会を開催する幹事の皆様へ※

本郷学園同窓会の運営委員会では初めて同期会を開催する回期の皆様に積極的に同期会開催を奨励支援致します。

「私個人としては開催したいが仲間がいない」
「同期会を開きたいが同期の名簿が無い」
「開催場所、打合せの仕方などアイデアが無い」
「同期会開催は良いが郵便の宛名書きなど人手が無い」
「我々の年代は会員が多く郵送費など一時的な出費を負担するのが大変だ」
「同期会を開催しても何人位出席するかわからないので会場設定が難しい」

この様な事で二の足を踏んで居られる方々は是非運営委員会に御相談下さい。何事も一人より二人、二人より三人のアイデアから道は開けます。発起人の方々と成功の秘訣を打合せ致しましょう。

各回期別同窓会台帳は完備しています。また、コンピュータで名簿の管理をしていますので宛名シールのプリントアウトは簡単です。

運営委員会では宛名書きと郵送費を一時立て替えし、実際の会の開催後に精算して頂くよう検討しています。

会場には、学校に近く二十名から百名位の収容できる所を紹介致します。その他、新聞掲載、同窓会ホームページへの書き込み等もお手伝い致します。

◆開催の手順例◆

第一回打合せを開催の二、三ヶ月前に発起人と行う。各クラス二、三名以上が好ましい。日時、会場を決定し、住所不明者をリストアップし、消息を探す。

第二回打合せを一ヵ月後、各クラスの発起人が不明者から判明した住所を持ちより当日の参加者検討。また、来賓の先生方への連絡等打合せ。代表発起人を選出して案内状作成する。新聞掲載、同窓会ホームページへの書き込みを行う。

案内状は開催一ヶ月前に発送する。出欠届を同封し、代表発起人宛てに十日前までには届くように。

当日の受付等を考えると始めは学校に集合し、懇親会に流れた方が幹事の方は楽な様です。

尚、運営委員会は毎月第三土曜日午後三時より学校に於いて開催しております。

同期会を開催して見ようと思われる皆様は、FAXにて連絡をお願い致します。

本郷学園同窓会運営委員会
FAX ○三（三九一七）○○○七

文化祭報告

（平成十三年九月二十二日、二十三日）

玉川　昭（中十九回）

今年のテーマ

「君の気持ちは痛いほどわかるよ」

ＪＲ線、南北線駒込駅を出て線路沿いに歩くと染井通りに入る。本郷学園への路である。

文化祭の大アーチが歓迎してくれるなか先輩達が卒業記念に植樹した銀杏並木を進む、一きわ大きな喚声に誘われて自然と足早になる。卒業以来半世紀を越えるのになぜか血が騒ぎ熱くなる。本館前の中庭には若さ若さではちきれんばかりの本郷生、他校から訪れた女子生徒、未来の本郷生を夢見る若き人とその御両親らしき方などなど、催会場や研究発表教室、模擬店のある「本郷市通り」や試合会場等を行き来する人の流れが引きも切らず、皆んながこの祭りに参加している様である。

パンフレットを手にして教室めぐりをする、卒業生と名乗って少々質問らしい言葉を掛けると滔々と説明をしてくれる。その懸命さは純粋そのもので素晴らしいの一言である。社会で活躍されている先輩方一度は訪れてこの何とも云えぬ躍動感に浸ってみてはいかがだろうか。

同窓会の部屋は本館三階高三一一〇教室を拝借させてもらった。今年の特別出展は高八回生、丸橋修氏ご提供の数々がメインを飾る。入学から卒業までを全て網羅してあり当時在校されていた方々には、青春の真只中にいた事を再確認させられる品ばかりである。平成十四年の祭りには更に多くの方々の出品をお願いしたい。休息用のテーブルでは例年通り関塚事務局長（高二十回卒）が中心になりコーヒー等の接待があり又コンピューターによるＯＢの情報交換等も活発に行われ、「千客万来」係一同休む暇もなかった。

すぐ向いの教室からは「父母の会」の女性による「ミュージックベルの響き２００１」コンサートが催され、ハンドベルのかなでる優雅な音色が我々をも楽しませてくれた。

後片付けには当教室の諸君も手を貸してくれ、早々と終わる事が出来た。

同窓会では総会が終わると休む間もなく副会長を中心に実行委員会が発足し会合が始まる。以上寸描を以って報告に代えます。

学園だより

■平成十四年度入試結果

国公立大学は、東京大（一）、東京工業大（三）、東北大（二）、北海道大（二）、千葉大（十八）、筑波大（一）など延べ四十五校であり、ほぼ昨年並みの結果である。

私立大学に関しては、全体で七百八校であり、早慶上智理科大については、早稲田大（二十二）、慶應大（十九）、上智大（十三）、東京理科大（五十二）、延べ百六校と昨年より約二割の減少である。いわゆるＭＡＲＣＨ＋Ｇについては、明治大（三十二）、青山学院大（十三）、立教大（二十二）、中央大（二十七）、法政大（二十九）、学習院大（十四）、延べ百三十七校と昨年より約三割の減少である。早稲田大・東京理科大での現役生の苦戦、明治大での浪人生の苦戦、中央大・学習院大での現役生・浪人生の苦戦が大きく影響している。

■指定校推薦制大学は、青山学院大（理工）、学習院大（文・法）、慶應義塾大（理工）、上智大（理工）、中央大（商・法）、東京理科大（理工）、法政大（工）、早稲田大（商・第一文・理工）その他合計三十六校

■国立大学合格者四十五名

千葉大、筑波大、東京大、東京工業大、東北大、北海道大、横浜国立大、東京都立大、東京農工大、防衛大学校　その他

■私立大学合格者七百八名

青山学院大、学習院大、北里第、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、中央大、東京歯科大、東京農業大、東京薬科大、東京理科大、東邦大、日本医科大、法政大、明治大、明治薬科大、立教大、立命館大、早稲田大　その他

なお合格者が重複しているが、その他多数となっている。

平成 13 年度事業報告

自・平成13年４月１日　至・平成14年３月31日

（平成十三年）	
四月六日	本郷高等学校入学式
四月十四日	理事会・懇親会
四月二十九日	臨時運営委員会
五月十九日	運営委員会
六月一日	銀友三十号発行
六月十六日	定期総会・懇親会
七月二十一日	運営委員会
八月二十五日	理事会・懇親会
九月十五日	運営委員会
九月二十一日	文化祭出展準備委員会
九月二十二／二十三日	学園祭・文化祭
十月二十日	運営委員会
十一月十日	運営委員会
十一月十七／十八日	第二回親睦旅行会
十二月十五日	運営委員会忘年会
（平成十四年）	
一月十九日	理事会・新年会
二月十六日	運営委員会
三月一日	高校卒業式
三月十六日	運営委員会
三月二十日	中学卒業式

平成 13 年度一般会計報告書

自・平成 13年４月１日　至・平成 14年３月 31 日

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前年度繰越金	1,499,086	卒業記念品費	173,850
会費（1,133名）	2,981,000	文化祭出展費	39,699
入会金（376名）	1,128000	印刷費（一般）	33,600
雑収入	22,125	印刷費（銀友）	1,142,505
受取利息	369	発送費（銀友）	988,380
		発送手数料（銀友）	156,504
		通信費（ＨＰ含む）	127,923
		名簿管理保守費	231,651
		事務用消耗品	5,116
		会費郵便振替手数料	80,040
		振込手数料	3,254
		交通費	1,380
		コンピュータ他購入費	293,429
		次年度繰越金	2,353,249
合計	5,630,580	合計	5,630,580

平成 13 年度名簿編集積立金明細

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前年繰越金	1,937,165		
受取利息	179		
		次年度繰越金	1,937,344
合計	1,937,344	合計	1,937,344

預金明細

現金	27,740
東京三菱銀行普通預金	1,931,098
郵便貯金	2,331,755
合計	4,290,593

本郷学園同窓会　会長　村松達夫
本郷学園同窓会　会計　寺田正美
本郷学園同窓会　監事　見並　力
本郷学園同窓会　監事　松坂忠明

平成 14 年度事業計画

自・平成14年４月１日　至・平成15年３月31日

（平成十四年）	
四月六日	高校・中学入学式
四月二十日	理事会・懇親会
五月十八日	運営委員会
六月一日	銀友三十一号発行
六月二十二日	定期総会・懇親会
七月十三日	運営委員会
八月三十一日	運営委員会
九月七日	理事会・懇親会
九月十四日	文化祭出展準備委員会
九月二十一／二十二日	学園祭・文化祭
十月十九日	運営委員会
十一月十六日	運営委員会
十二月二十一日	運営委員会忘年会
（平成十五年）	
一月十八日	理事会・新年会
二月十五日	運営委員会
三月一日	高校卒業式
三月十五日	運営委員会
三月二十日	中学卒業式

平成 14 年度一般会計案

自・平成 14年４月１日　至・平成 15年３月 31 日

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前年度繰越金	2,353,249	卒業記念品費	200,000
会費（1,500名）	3,000,000	文化祭出展費	50,000
入会金（367名）	1,101,000	印刷費（一般）	25,000
受取利息	300	印刷費（銀友）	1,150,000
		発送費（銀友）	1,000,000
		発送手数料（銀友）	160,000
		通信費（ＨＰ含む）	150,000
		名簿管理保守費	200,000
		事務用消耗品	10,000
		会費郵便振替手数料	105,000
		振込手数料	5,000
		交通費	10,000
		予備費	50,000
		次年度繰越金	3,339,549
合計	6,454,549	合計	6,454,549

平成 14 年度名簿編集積立金予算案

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前年繰越金	1,937,344		
受取利息	0		
		次年度繰越金	1,937,344
合計	1,937,344	合計	1,937,344

本郷学園同窓会会費納入者一覧

平成十四年三月三十一日現在

中1回　野本　泰
中2回　栗山　巍、田代　康虎、長沼　守人、船橋徳太郎
中3回　青柳　志郎、泉津井　玄、忍田　太郎、高松　鶴吉
野本三千雄、本郷　次郎、吉村　貞夫
中4回　伊藤　英治、池谷　欽一、宇田川義雄、亀甲　勲
沢部　政直、杉本　金馬、吉田　憲二
中5回　井上　栄一、井上　久男、石井　千里、香川　健二
小山　敏夫、小林　裕、高須　勉、田中　宗一
服部　嘉丸、山内　修
中6回　伊神大四郎、大和　禎人、小出　一夫、佐原雄次郎
橋本　七郎、秀島　辰弥、山本　秀明、吉田　弘幸
四谷　輝久
中7回　秋元　庄司、大原　泰治、小松　幸生、東風谷秀雄
寺井　實、山口　毅
中8回　浅井　美雄、石坂　岩雄、鈴木雅一郎、鈴木　貞夫
瀬戸　正弘、園部　三郎、谷崎　丈夫、竹田　亨
長嶺金次郎、山中　隆二、湯原　豁
中9回　合場　信次、網谷　英二、有賀　活郎、有村　純臣
伊藤　巌、鵜木　諄、小沢　秀義、大塚秀太郎
五味　重春、佐々木岸太郎、斎藤　富一、千葉　青保
徳田喜一郎、長島　照雄、久水　康春、吉原　晴夫
吉成　久志
中10回　伊藤　龍昭、井口　信雄、飯田　博通、大多和利治
大塚　信男、久住　進一、後藤　恒久、小泉　進
鈴木　勝美、永井　吉男、中川　時重、中川　統一
内藤　和彦
中11回　青野　廉、市川　雄一、上田　義雄、小川　邦夫
太田　芳蔵、尾川　勝助、海津　力、角田　栄三
鎌田　勝雄、木村　善男、黒川　興文、近藤　要
公平　武、小林　義雄、関口　二郎、高橋　耕一
戸塚　貞治、永田　忠哉、中野　武正、長妻　義鑑
茂呂　豊、山崎　治憲、八杉　繁　保持　明
林　伸行
中12回　新井　洗、石原　豊英、上村　和夫、楠本善一郎
後藤　嘉徳、坂口　甫、富田六之助、堀　一郎
松岡　和光、前田　晴久、山田　英彌、由井洋四郎
吉田　三男、吉田　正吾、小松　昭、高貫　繕晴
今井　幸太、石原　清助、梅田　眞男、太田　恭二
中13回　菊田　満保、久保　秀郎、栗林喜久雄、黒鳥　四朗
公平　勇、小森　為郎、鈴木　和男、橘　正道
高橋　正、調所　輝也、寺門　務、永田　三郎
中村　允、花里　八郎、平本　義雄、村上　忠之
山口　一弘、山本　昌雄
中14回　岩村　龍明、石川　芳正、小野　一郎、尾立　維久
加藤　健造、工藤　一葦、佐藤　三良、柴崎甲子夫
鈴木　一郎、高野　睦、多賀　一郎、田中　光晴
田幡　徹、西村　博、菱山　勇次、藤井　繁太
藤井　稔、堀江　伸美、本田　磐雄、宮崎　卓郎
宮崎　和哉、村田　利博、森本　三郎
阿部　敏秋、新井　文一、青柳　巍、入江　幸夫
中15回　奥平　保正、荻原　久雄、太田　年三、菊田　治
栗原　重雄、近藤　巍、臥合　邦夫、佐々木象一
鈴木　利一、高沢　俊、土屋　健人、中山　甲一
中西　弘毅、中村　美登、野村　秀二、萩原　友郎
畑　定、松本　八郎、宮森　清久、宮本　幸雄
吉井　和夫、吉松　茂弥、吉田幸之輔、渡辺　大乗
松田　光博
中16回　伊藤　篤行、大沢　欽一、大津　泰三、加瀬　量次
菊地　宏、木村　宮造、木村　康夫、小永井　暹
白井　明、高橋　樟守、田中　光男、田中　凡夫
近澤　勝利、永田　了、野尻　利祐、羽根孝太郎
原　栄蔵、樋代　幸雄、古内　正禧、藤田　洋一
松本　広、和田　節
中17回　阿出川昭治、安養寺　喬、按田仁三郎、荒野　幸次
秋田　禮一、井桁八三郎、鵜沢　謹爾、乙部　邦壽
小川　清、小倉　高規、大村　雅通、大野　肇
尾前　広、加賀野井清作、垣　喜一郎、亀岡　周
佐藤　元徳、佐藤　剛偉、斉田　貢一、齋藤　敏夫
澤木　一、下村多気夫、新谷　卓司、清水　英夫
清水　吉一、島田　威、高野　正美、田中　稔
千葉　孝男、角折　幸輝、塚本　直人、寺口有喜公
中山　茂、野瀬田朏生、原　昭一郎、原田　幸夫
保坂　忠夫、益田　泰彦、前田　昌弘、町田　滋
村松　達夫、森　宏、蕨　清平、鈴木　隆
愛　利三、安達　正治、雨宮　昭二、新井　義雄

新井　保文、青戸　将、青木　益嘉、井樽　孝
磯川　清和、磯野　泰夫、岩崎　昭、岩渕　正己
五十嵐　宏、今里　隆、石田　順嗣、植田　茂
榎本　輯次、岡田　光正、大原　功、大西　宏
大澤　清、大沢　善和、加藤　浩正、蒲生　勇三
金子佐多美、菊地　熙夫、北村廣三郎、北堀　幸雄
久保田　稔、栗山　春雄、駒井　嘉直、後藤　良一
佐々木一昭、志田　芳久、清水　正美、菅野　英夫
菅野　武司、鈴木　充、鈴木　卓三、瀬川　昌男
妹尾　尚、高橋　一夫、高橋　操六、高橋　直林
田中　健一、田中　利雄、千葉兼太郎、土屋　恭一
藤堂　正彰、冨山　栄、富田　和雄、豊崎　益夫
友安　昭治、中山　守次、中山　正、仲摩　邦夫
長谷　鉚三、二木　清夫、野本　昭、長谷川忠也
馬場　隆、服部　定善、疋田　哲也、檜垣　順次
細井　孝、菩提寺悦郎、間野　芳夫、松永　昭二
松廣　翠、松田　裕、松島　寿夫、松本　純治
前田　和男、宮田　昭平、水原　奎一、村野　桂三
武藤　泰夫、森　正徳、森本　肇、山先　昭三
山田　卓治、渡部　豊一、渡辺　信夫

中19回
阿出川義男、新井　忠彦、石井　博夫、岡田　貢一
乙坂　保、貝塚　明雄、亀山　謙治、菊田　勇
佐藤　輝義、重永　政夫、曽川三千昭、玉川　昭
高橋　實、高橋　昭彌、竹本　三男、田中　賢司
西村　努、保谷　六郎、増田　速水、山崎　達司
山本　巌、簗　尚
中20回
井上　義三、市川　恒雄、大屋　忠、大塚　康夫
金澤　一朗、神山　智久、倉田桂二郎、田島　利男

鶴岡　俊雄、中島敬太郎、羽山　健児、橋本　公成
久永　幸隆、藤林　晃、皆川　敬次、山下　保次
山中　伸介、吉田　秀世、新井　敏夫、市川　保
菊入喜三郎
中21回
阿知波　健、井上　宏之、市橋　光雄、池田　昌弘
板倉　厚、大下　晃、古門　敏郎、小林　國雄
新澤　良孝、島崎　哲雄、田村　義雄、田中　一好
外内　悦雄、中田　幸吉、中林　商蔵、二宮　重恒
根本　幹弘、古澤　秀信、星野　昌弘、持田　耕一
横澤　邦彦
中22回
有田　利光、井筒　千秋、稲田　稔、田中　昭二
越田　和夫、須田　光夫、高田　政雄、中原　豪彦
福沢　昇、江森　俊男
高1回
相川　厚、佐治　栄一、堀井幸次郎
高2回
井原　俊郎、岡村　孝彦、木村　敏夫、坂野　重一
櫻井　泰、清水真太郎、豊嶋　敬司、中村　嘉宏
西島　成一、羽生　銭佑、浜野　清隆、廣瀬　六郎
高3回
篤　碩男、石川　達夫、植松　隆吉、奥平　博一
大槻　一雄、北見　尹、志野原三津夫、合田　平
小浜　卓司、佐々木三郎、坂田　実、地曳　秀雄
高原　秀信、千田　昇、長崎　一
平子　浅雄、前田　善男、光安　伸夫、望月　敏郎
山岸　正治、山口　洋司、山内　英夫、吉田　孝光
高4回
西江　峰夫、向井　利男、八嶋　政臣、渡辺　武男
佐々木直剛、廣瀬　澄
高5回
井沢　清、市村　近、梶野　伸二、島崎　雄司
谷川　洋明、田畑　光利、中林　忠昭、横田文一郎
高6回
赤羽根　弘、伊藤洋之助、奥村　茂、小椋　一

大久保義勝、小野　耕一、勝野　恵之、川窪　国明
北川　貞雄、栗原廣太郎、後藤　順夫、小林　金則
小林　秀行、佐々木啓之、篠　喜三郎、霜越　佶
関　計一郎、寿夫、中村　桂三、谷澤　文雄、津久田愛之助
中山　義一、中里　盛次、根立　光夫
丸橋　修、松坂　忠明、松本　易夫、松本　幸司
前田　明男、宮内　順三、渡辺　勝、渡辺　昭義
市川錦次郎、久保田義喜
高7回
秋元　幹夫、有田　常義、井島佳二郎、桂　孝雄
武田　之孝、平田　満男、益川　雄治、山内　周
矢田　明二、風間　幹雄
高8回
角能　好宣、金子　隆一、金杉　修、芥川　定義　晃、勅使河原宏記
藤巻　健三、南谷
高9回
鵜沢　速雄、田辺　博昭、西江　正晴、比企　正憲
吉田　穆
高10回
青木　弘三、岡本　信也、亀井　俊一、白井喬一郎
田中　秀明、塚原　静夫、中河　秀行、茂出木義雄
山崎　昇、八木橋　実
高11回
會田　光雄、太田　善夫、小池　弘祐
高12回
市倉　洋一、熊木　宏治、辻本　靖、西野　保博
松嶋　方也、渡辺　勝平、阿久津三男
高13回
阿出川信夫、安達　義道、相川　清、清川　洋吉
斎藤　毅、中村　久
高14回
千野　英明、山口　俊章
高15回
新　安雄、杉山　雅一、高井　英行、高田　隆義
峰岸　桂介
高17回
青山　昭男、賀澤　光浩、野田　祐二
榊原　康夫、丹波信三郎、田原　克人、根木　輝久

高19回
秋葉　和秀、石原　崇光、遠田　守利、斉藤　忠
沼尻　卓、長谷川　実、増山　恵一、吉倉　幸信
中村　博
高20回
我妻　光久、大野　英治、梶　徳治、後藤　文雄
小林　基展、坂井　秀雄、関塚　正治、戸張　友晴
西原　薫、堀部　雅美、町田　準一、矢代　順一
良川　眞
高21回
岩越　政美、菊地　正美、杉山　利博、鈴木　斉
中里　勝男、西　正規、早川　盛男、檜山　隆史
松宮　成直、松本　一広
高22回
榎沢　敏明、遠藤　達哉、大恵　淑行、木下　寛明
柴田　秀利、鈴木　正治、瀬賀　春雄、中島　二郎
高23回
池野　直樹、小国　信男、太田　治、加藤　弘明
篠　義法、高橋　博、仲原　辰男、飛田　茂
高24回
宇多川勝幸、掛川　敏行、進藤　久幸、田中　良一
寺田　正美、仲屋　努、野田　悠二、日高　詳介
松島　和己、村上　信夫
高25回
春日　貞男、清田　健蔵、栗山　孝治、佐野　養
坂井　成一、荘子　隆之、田島　秀行、千野　邦雄
長沢　弘幸、松井　一彦、松崎　敏弘、山口　登
吉田　徳義
高26回
伊藤　正彦、稲田　俊和、岩崎　一、窪田　欣志
笹沼　博之、柴　安弘、杉浦　晶、田中　成明
立花　英一、立入　健司、益子　弘毅、庭野　毅
松平　善明
高27回
安部　昌治、秋山　喜弥、岩崎　充晃、岡村　桂一
大熊　孝行、河野　敏明、高橋　伸治、長瀬弘一郎
並木　嗣男、原田　俊幸

高28回
井口　隆、岡野　智彦、金子　一清、上谷内純一
古谷野昭則、清水　英夫、杉山　豊、田中　実
堀江　至久、松原　祐行、山本　和弘
高29回
安住　高弘、飯泉　彰裕、大久保　実、大橋　弘明
香川　耕二、木田　卓、菅野　弘一、田中　政春
中村　茂樹、船見　春夫、藤井　政夫、森　雅彦
森山　昇一、横山　鉄夫、渡辺　嘉伸
高30回
藤原　領一
高31回
朝香　等、小川　雅也、佐藤　修一、富永　浩伸
鈴木　宏昌、土村　弘己、虎溪　文有、中村　貢司
羽毛田孝之、平野　勝之、山田　隆、山畑　邦裕
吉田　法夫、渡邊　忠一
高32回
江口　研二、沖田　陽一、垣澤　浩一、小瀧　恭雄
小池　治、永堀　義秀、古屋　隆史、山崎　伸二
若松　宣彦
高33回
磯田　浩之、岩田　実、遠藤　千秋、斎藤　卓
鈴木　康悦、滝本　学、田中　友弘、西　洋一
福島　浩、別所　篤、丸山　茂、湯本　光紀
吉田　秀樹
石川　淳、大久保　誠、鎌田　尚元、金子　泰久
高34回
外山　竜太、塚原　利晶、根石　宏紀、平澤　賢也
平澤　淳、宮崎　雄一、渡邊　哲寛
高35回
清水　哲也、藤本由紀夫、坂宮　栄一、平野　治
諸石　貴生、金澤　英之、丸橋　英正、阿部　貴成
茂呂　孝元、木村　高久、染谷　敏昭、本荘　恭一
井田　七海、野口　貴洋、増岡　武宏　功、小林　善人
高塩　能孝、川端下徳之、萩谷　信夫、本田　吉彦
田邊　賢一、松本　圭一、新井

高37回
杉浦　幸宏、中上　玄文
國藤　和重、小野寺和彦、根岸　延存、土田　賢一
小林　順一、横川　高樹、城　和夫、矢島　俊之
矢野　克行、荒木　健一、高野　記好
高38回
鈴木　拓也、宮崎　浩孝、中山　久嗣、吉本　光博
佐藤　秀行、大野　秀樹、石井　郷、奥村　直和
工藤　琢
原口　智、森　靖、冨永　聡、矢嶋　実
高39回
寺山　義泰、本荘　竜二、伊達　裕治、木村　二郎
保谷岳太郎、和田　直樹、木納　俊之、篠原　史孝
垣沢　真也
高40回
丸橋　俊正、日枝　広道、重川　孝志、小林　善幸
田畑　準、小田中秀之、吉松　耕司
高41回
小掛慎太郎、関口　隆之、岡田　博、本島　良浩
富沢　信夫、紙谷　淳一、梅田　昌之、小林　和弘
増田　茂、齊藤　哲也、秦　正信、長谷　隆仁
漆原　隆浩、小堤　健雄、鎌田謙二郎
高42回
本井　利生、稲澤伊知朗、今川　敢士、高峰　伸宜
千葉　啓、三村　淳悟、東尾　隆之、峰　茂憲
上西　晃夫、大澤　清、桜間　一彰、藤田　恵輔
大石　正昭、佐野　禎、橋本　武治、石本健太郎
安藤　洋介、横山　仁、塩家　吹雪
高43回
萩原　孝明、古賀　淳也、古塚　浩一、小林　義明
伊藤　正規、松本　祐一、服部謙太郎、上原　弘行
中田　一郎、針谷　寿紀、中村　歩希、山野邊康史
西平　敦郎、中村　剛、工藤　順一、野口　拓栄
斉川　英明
大久保裕司、小久保　健、鶴見　裕之、蓮沼　鉄也
高44回

五十嵐　靖、久保村　豊、丹波　宏崇、加藤　立
藤田　啓、津田　達広、木下　偉雄、氷見　健一

高45回
江口　健男、下平　貴、赤田　正樹、土生　健二
青木　和久、高井　亮任、中島　信之、岡田　浩典
中野　隆之、平野　大介、村田　朋泰
柴崎　直樹、金子　隆、鈴木　健一、石川　嘉博

高46回
北澤　卓弥、谷口正太郎、山田　洋一、涌井　嘉人
荒井　昌之、長谷川浩一、則松　計征、渡邉　信貴
小林　永芳

高47回
大森慎太郎、河村　英俊、森　吉寛、北岡　竜行
伊藤　秀典、今氏　照樹、島村　正夫、高野　知明
中村　紘大、酒井　陽介、関根　傑紀、三代　泰平

高48回
高井　智任、島根　宏幸、秋山　周司、橋本　直人
稲生雄一郎、佐藤　卓也、菅沼　敦、中村　織雄
新谷　健一、古見　高広、増田　健次、柳沼　良
川島　昌弘、小宮　秀介、坂本　一平

高49回
町田　健、米山　航史、川本　大輔、柴田　裕介
早川　和樹、堀　洋平、増田　望、立川　嘉久
林　誠吾、安井　督、上野　光信、小澤　正
渡邉　龍秋、島田　和輝、中溝　健晴、近藤　大介
千種　伸宜、山田　元文、渡部慎吉郎
伊藤　充輝、小林　悟、浜野　吉明、池畑　将希

高50回
小林　高明、相沢　和彦、境野　稔浩、下関　秀之
本澤　俊一、浅岡　祐介、島村　有希、菅沼　博
田原　悠西、乾　嘉宏、綱島　宗介、古川　浩司
山下　拓也、吉河　秀郎、瀧川　道生、浅野　良太
柳川　忠之、財津　宜史、新村　光央、高原　修司
野村耕太郎、堀部　耕生

高51回
天野　秀忠、鮫島　仁、平野　宙、若山　貴裕
宇都　格之、梶野　貴経、白石　佑一、立澤　広平
山田　亮、佐藤　英明、須賀　裕哉、西岡　新平
萩原　将明、福田　哲也、西山　佳宏、松岡　孝介
阿部　智則、新井　亮輔、田中陽太郎、中田　孝宏
増田　幸久、溝渕　亮、関口　浩介、高月　忠昭
滝澤　一晴、行木　達朗、茨田　康弘、若杉　文寛
芦田　陽亮、内海　正人、斉藤　光広、中澤　利幸
橋爪　雄志、服部　大祐、濱野　和明、堀越　亮
大谷　賢志、乙丸　貴史、坂口　大介、鳴原　昌也
染谷　快典、丹羽　大輔、古島　剛、皆川　裕司
吉野　一哉、若西　良介、植村　典和、大塚久仁郎

高52回
井上健太郎、今田　卓郎、高橋　淳一、益戸　將吾
嶋田　亮輔、新開　太郎、関澤　泰明、高橋　智久
成瀬　隼人、長谷川智洋、間下　彰久、元森俊一朗
吉野　泰光、清野　泰広、小橋　裕之、諏佐　肇
中島　哲児、浜田　栄二、藤本　耕平、向井　崇平
新井慎一郎、市川　晋也、上田雄邦人、金子圭太郎
鈴木　常太、千田　昌宏、出口　輝明、本多　智洋
阿部　英人、鬼武　隆、小島　聡、坂本　泰宏
櫻田　啓太、相馬　利夫、竹内　潤一、野中　泰孝
野村　高峰、坂田　憲和、関本　英克、長岡　理大
平野　尚司、藤澤　健夫、鈴木　崇秀、中野　一平
篠原　洋次、関根　佑輔、船古　崇徳、松澤　一応
赤松　篤、猪越　正直、大塚　邦紀、田辺　和也
馬渡　千高、伊田健一郎、高橋　秀幸、長谷部篤史
一條　裕介、内田　修介、北島　康介、関根　淳
露崎　千晶、松永　拓也、渡邊　昌一、天野　雄介
石井　孝、今井　秀星、熊木　淳一、竹内　正典
田中　勲、田中　宏明、長橋　智久、水越　泰平
井手　悠輔、田中　竜太、梅澤　英輔、中山　洋明
藤田　豊、村松　純平、江川　勝久、栗山　孝幸
河野　秀介、古宮　嵩大、中井　秀昌、永島　広隆
福森　洋輔、山浦　太一、阿部　知司、荒井　大樹
奥山　雄太、齊藤　秀雄、鈴木　穣児、長南　基
塚田　貴伸、藤平　紘和、大塚　憲、奥田　健太
小島　将敬、曽原健一郎、鶴岡　廣哉、古屋　隆
安達　広幸、有馬　宏和、佐々木大輔、中村　旭
長澤　桂、日谷　堯、足利　英城、小川　直純
佐藤雄一郎、清水　章宏、福田　章吾、宮部　皓太
内原　嘉昭、太田　敬之、川原　正寛、後藤　泰治
立澤　伸也、深井　直樹、深山　敬大、佐藤　達哉
髙波　佑介

本郷学園同窓会会則

第一章　名称及び位置

《名称》
第一条　本会は本郷学園同窓会と称す。
《位置》
第二条　本会は事務所を東京都豊島区駒込四丁目十一番一号本郷学園内に置く。

第二章　目的

《目的》
第三条　本会は会員相互の親睦を厚くし母校の発展を図るを以て目的とする。
《事業》
第四条　本会は前条の目的を達するために次の事業を行う。
会員の親睦会の開催、会誌の発刊、母校後援事業、名簿の調整と発刊、ホームページの運営、慶弔等。

第三章　組織・役員

《会員》
第五条　本会は次の会員を以て組織する。
会員は、母校卒業者及び卒業生待遇者並びに中途退学者で会員の紹介により理事会の承認を得た者とする。
《役員》
第六条　本会には次の役員を置く。
名誉会長　一名、顧問　若干名、相談役　若干名、
会長　一名、副会長　若干名、
理事（各回期一乃至三名）監事　二名
《役員選出》
第七条　前条の役員は次の方法により定める。
名誉会長は本郷学園理事長を推薦する。
顧問は本郷学園名誉校長及び校長並びに会長経験者を推薦する。
相談役は副会長・理事・監事の経験者で会長の委嘱により推薦する。
会長は理事会において理事の互選により選出する。
副会長は理事中より会長の委嘱によって定める。
理事は、各回期毎に選出し総会の承認を得るものとする。但し選出のない回期からの理事は一名を会長が指名委嘱し総会の承認を得るものとする。
監事は、会員中より選出する。
会長・理事・監事は選出後の最初の総会の承認を得るものとする。
《役員の職務》
第八条　役員は次の職務を行う。
会長は会を代表して会務を総括執行する。
副会長は会長を補佐し会長事故あるときは副会長間において定める順位により会長事務を代行する。
理事は、理事会に出席して、本会の運営に参画する。
監事は会計を監査する。
顧問・相談役は会長の要請ある時は随時出席して意見を述べる。
《役員の任期》
第九条　役員の任期は三年とする。

第四章　会議

《会議》
第十条　本会の行う会議は、総会、理事会、運営委員会とする。
会議の議長は、会長が指名する。

《総会》
第十一条　総会は本会の最高議決機関とする。
定期総会は毎年一回原則として母校で行い会務報告、役員の承認、会則改正その他本会に関する重要事項を議決し且親睦会を兼ねるものとする。
会長は理事会の議決により臨時に総会を招集することができる。
《理事会》
第十二条　理事会は理事を以て構成し理事の過半数の請求、もしくは会長の要請により開催し本会に関する一般事項を審議する。
《運営委員会》
第十三条　運営委員会は、副会長及び本会の事業を担務する理事で構成し、会長の招集によって開催、本会の運営にあたる。
運営委員会に副会長中より会長の委嘱によって事務局長を一名おく。

第五章　事業及び議決

《事業の遂行》
第十四条　理事は担務を定めて会誌の発刊、企画、会計、庶務その他の事業を遂行する。
第十五条　理事会において立案された本会の事業は総会の議決を経るものとする。但し、急を要する場合は理事会において処理するものとし、次回の総会において承認を得るものとする。
《議決》
第十六条　会員は総会において一様に発言権・議決権を有し、総会、理事会の議決は出席者の過半数をもって決する。可否同数の場合は議長が決める。

第六章　会計

《事業年度》
第十七条　本会の会計年度は毎年四月一日に始まり、翌三月三十一日に終わる。
《会計》
第十八条　本会の経費及び事業資金は入会金及び普通会員の年会費並びに寄付金その他を以てこれに充当する。
一旦納入した金品は一切返還しない。
第十九条　本会の収支決算は毎年総会に於いてこれを報告、承認を得るものとする。
第二十条　会員は年会費を一口金弐千円として一口以上を毎年納付するものとする。
卒業時の入会金は参千円とする。

第七章　付　則

第二十一条　本会則は総会において出席会員の三分の二以上の賛成がなければこれを改正することを得ず。
本会則は平成十三年六月十六日より施行する。

以　上

訃報

謹んでご冥福をお祈り致します

中二回　橋本　文郎
中二回　岡部　武雄
中二回　船橋徳太郎
中二回　水野　重眞
中三回　吉村　貞夫
中三回　山崎洋志夫
中四回　吉田　憲二
中四回　木村　正夫
中五回　嵯峨　典祥
中五回　山内　修
中八回　鶴森　輝邦
中十回　井口　信雄
中十一回　高橋　賢三
中十一回　林　伸行

中十三回　永山　恭平
中十三回　菊田　満保
中十三回　片寄　三郎
中十四回　小野　一郎
中十五回　高山　達雄
中十五回　庭野　一夫
中十六回　松本　広
中十六回　荒　司朗
中十七回　佐藤　剛偉
中十七回　原田　幸夫
中十八回　田中　利雄
中二十一回　清水　哲治
中二十一回　池田　昌弘
中二十二回　梅山　勇

高三回　山岸　正治
高九回　長谷　幾夫
高十二回　辻本　靖
高二十回　曽我　広幸
高二十四回　伊藤　輝慶
高五十回　横山　純一

敬称略

役員

会長　村松　達夫（中十七回）
副会長　宮本　幸雄（中十五回）
〃　望月　敏郎（高三回）
〃　山内　英夫（高三回）
〃　篠　喜三郎（高六回）
〃　秋元　幹夫（高七回）
〃　丹波信三郎（高十八回）
〃　関塚　正治（高二十回）
〃　田中　良一（高二十四回）
〃　寺田　正美（高二十四回）

投稿のお願い

銀友編集委員は皆さんの投稿をお待ちしております。

これは・・・

こんな・・・

何でも結構です。

学校の先生、自由業、会社員、自営業、経営者、専門学校生、大学生、色々な立場で活躍されている三万名にならんとする同窓会会員の皆さん。

同窓会唯一の情報誌である銀友の誌面を、より充実した物にするために、我と思わん方は是非、銀友編集委員まで原稿を送って下さい。

（出来れば丁度二頁になるようにお願いします。写真を入れても結構です。）

原稿送付先　〒一七〇―〇〇〇三

東京都豊島区駒込四丁目十一番一号

本郷学園内　本郷学園同窓会銀友編集委員宛

編集後記

例年頭を悩ませるのは原稿の収集ですが、銀友三十一号は学校からの寄稿も充実し、編集を無事に終了することが出来、関係諸氏の協力の賜と感謝致します。

また、村松会長のもと、平成十三年度の行事は昨年六月の総会以降滞りなく行われ、前会長から引き継がれた同窓会の活性化は進行しているので、同窓会会員一同のより一層の協力をお願い致します。

それから、今年から始まった、完全週休二日制のゆとり教育を標榜する教育改革の中にあって、我が本郷学園が、建学の精神にある国家枢要の人物を育成するという考え方の上に立ち、より充実した教育を後輩諸君に与えられん事を切に望む次第です。

ところで、毎度の事ながら、銀友三十二号にもＯＢ各位の協力と投稿を願い、編集後記に換えさせて頂きます。

銀友編集委員一同

本年度の文化祭は
9月21、22日です。
卒業生のご来場を
お待ち致します。

平成14年6月1日発行
本郷学園同窓会
発行責任者　村松　達夫
〒170-0003　東京都豊島区駒込4-11-1 本郷学園内
同窓会へのお問合せはFAXにてお受けします。
FAX：03-3917-0007